

「主体的に学習に取り組む態度」が観じられる授業

☆課題の所在

2019年1月文科省(報告)「児童生徒の学習評価の在り方について」では、学力の観点別評価の観点において、従来の「関心・意欲・態度」から「主体的に学習に取り組む態度」に変更した経緯を次のように説明している。

「主体的に学習に取り組む態度」については、挙手の回数やノートの取り方などの形式的な活動ではなく「子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直ししながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる。」

「このことは現行の『関心・意欲・態度』の観点についても本来は同じ趣旨であるが」上述のような「誤解が払拭し切れていないのではないか、という問題点が長年指摘され現在に至ることから、『関心・意欲・態度』を改め『主体的に学習に取り組む態度』としたものである。」

つまり、「主体的に学習に取り組む態度」の評価に際しては、単に継続的な行動や積極的な発言等を行うなど、性格や行動面の傾向を評価するということではなく、各教科等の「主体的に学習に取り組む態度」に係る評価の観点の趣旨に照らして、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要であるとされている。

さらに本報告において、「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、以下の2つの側面を考慮して評価することが強調されている。

① 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面

② ①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面

これら①②の姿は実際の教科等の学びの中では別々でなく、相互に関わり合いながら立ち現れるものとしている。つまり、①②の側面が表出しているような授業が、新しく改定された「主体的に学習に取り組む態度」に適う授業であり、そのような授業改善の工夫が求められているのである。(*1)(*2)

本研究では、上記のような授業改善をめざすために、研究主題を「『主体的に学習に取り組む態度』が観じられる授業」と定め、授業研究に取り組むことにした。「感じられる」ではなく「観じられる」を用いた理由は、感覚的な「感じ方」だけで授業観察するのではなく、授業者も授業参加者も「主体的に学習に取り組む態度」をより正しく捉え見取っていけるようにしたいという本研究のねらいを込めているからである。そのねらいを具体化するために、以下の研究の視点を設ける。

☆研究の視点

A 「学びのエンゲージメント」を表出させる活動

本研究では、心理学における概念「エンゲージメント(engagement)」に注目する。「エンゲージメント」とは「『心理的没入』」とでも表現できようか。課題に没頭して取り組んでいる心理状態、すなわち、興味や楽しさを感じ

じながら気持ちを集中させ、注意を課題に向けて持続的な努力をすすめる『熱中する』心理状態（Reeve 2002）（*3）である。そして、「学びのエンゲージメント」とは、「主体的に学習に取り組む態度」とほぼ同義であるとされている。（*4）本研究では、この「学びのエンゲージメント」に注目することで、前記（報告）のような「挙手の回数やノートの取り方などの形式的な活動」や、単なる活動の勢いだけで学習の深まりが観られないような授業等での児童の様相を「主体的に学習に取り組む態度」と捉えることを避け、また、前記（報告）のような児童が「意思的な側面（粘り強さ、自己調整など）」を表出しながら学習の深まりに向かう様相を「主体的に学習に取り組む態度」とした授業改善を促すことができると考え、本研究での中心的な概念として用いることにした。

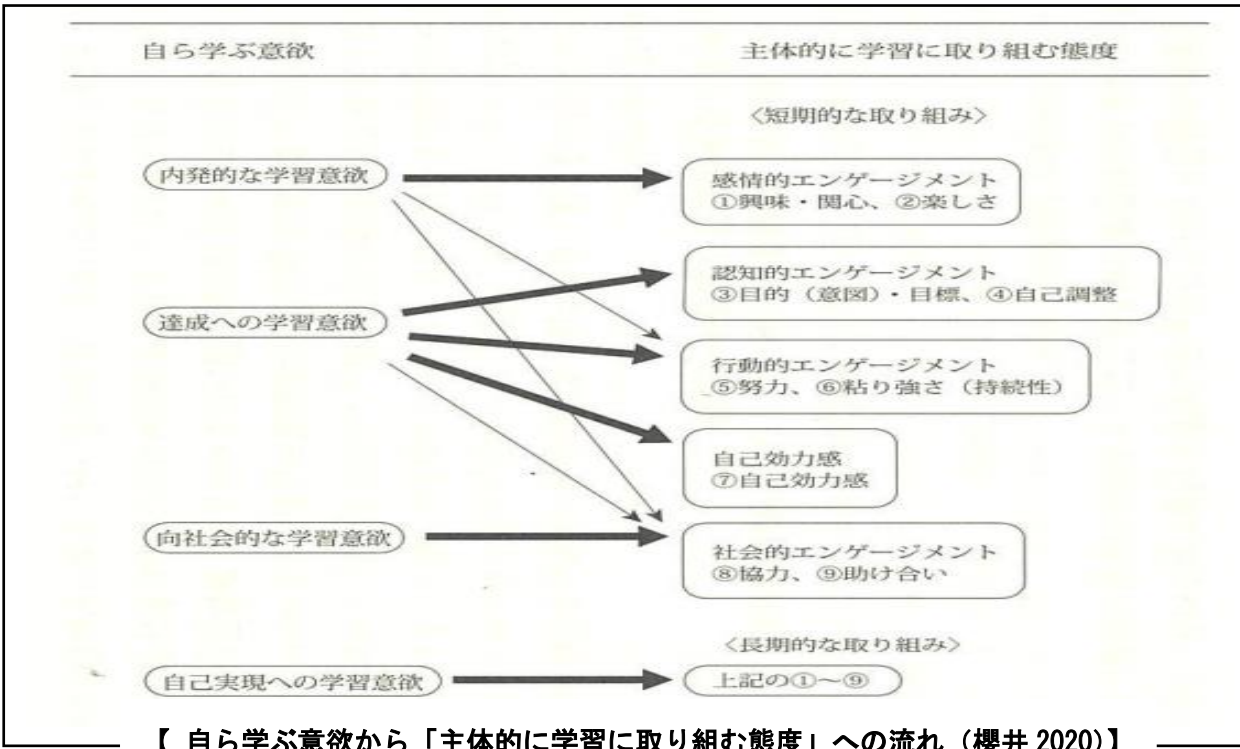
「学びのエンゲージメント」は、主に①感情的エンゲージメント ②認知的エンゲージメント ③行動的エンゲージメントの3つの要素で構成されている。これらは 学習における意欲的な取り組み方を、感情レベル、認知レベルからとらえたものであり、それらは統合的に機能する。（*5）

- 感情的エンゲージメント…「興味や楽しさといったポジティブな感情を伴って取り組んでいること、あるいはその態度」
 - 認知的エンゲージメント…「ものごとを深く理解しよう、ハイレベルの技能を身に付けようといったような目的（意図）を持ち、自分の学習活動についてきちんと計画し、モニターし、そして自己評価するような問題解決プロセスとして取り組んでいること、あるいはその態度」
 - 行動的エンゲージメント…「課題に注意を向け努力し粘り強く取り組んでいること、あるいはその態度」

これらの「学びのエンゲージメント」を授業に表出するためには、学習導入時に、「自ら学ぶ意欲（動機）」を児童に持たせるが必要になる。「自ら学ぶ意欲」は下のように分類される。

- 内発的な学習意欲 …「未知なことや不思議なこと、詳しいこと（おもに興味関心があること）を探究したいという意欲」
 - 達成への学習意欲 …「できるだけ高い目標を定めて、その達成のために頑張ろうとする意欲」
 - 向社会的な学習意欲 …「クラスやグループの人のために（教えてあげたり、協力したりして）役に立ち貢献するように学びたいという意欲」
 - 自己実現への学習意欲…「自律的に将来や人生の目標を決め、その目標の達成をめざして学習をしていこうとする長期的な意欲」

そして、「学びのエンゲージメント」と「自ら学ぶ意欲」の関係は以下のようにまとめられている。



文科省（報告）により示されている「主体的に学習に取り組む態度」には、「粘り強さ」や「自らの学習を調整する」といった意思的な側面が重視されている。それらはそれぞれ行動的エンゲージメントと認知的エンゲージメントと対応した態度であり、それらの授業導入時の「動機付け」としては、「達成への学習意欲」を喚起することが必要であるということが上の図よりわかる。

しかし、日々の学習の中では、必ずしも「達成への学習意欲」を取り入れた学習過程でないと「粘り強さ」や「自らの学習を調整する」が表出できないというわけではないと考える。例えば、低学年の図画工作科の授業では、「面白そう」「やってみよう」という「内発的な学習意欲」をもって作品を作り始め、作り変えながら、「粘り強さ」を発揮したり、教員の支援が加われば「自らの学習を調整」したりすることも考えられる。（＊6）したがって、本研究では「達成への学習意欲」のみならず、「内発的な学習意欲」からも意思的な側面（「粘り強さ」「学習の調整」）へのアプローチの方法も探究していきたい。

以上のことをふまえ、本研究では、学齢や学習内容に応じて、どのような「内発的な学習意欲」「達成への学習意欲」を設定すれば、意思的な側面（「粘り強さ」「学習の調整」等）を児童が表出できるようになるかを授業改善の視点の1つとする。

B 「ギャップ」に注目した振り返り活動

「自らの学習を調整しようとする側面」について、文科省（報告）では次のように示している。（＊7）

「主体的に学習に取り組む態度」の評価とそれに基づく学習や指導の改善を考える際には、生涯にわたり学習する基盤を培う視点をもつことが重要である。このことに関して、心理学や教育学等の学問的な発展に伴って、自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考の過程等を客観的に捉える力（いわゆるメタ認知）など、学習に関する自己調整にかかわるスキルなどが重視されていることにも留意する必要がある。

これらに加え、メタ認知は「様々なコンピテンシーを発揮していくための前提」とも言われており、自己調整やメタ認知に関わるスキルを、学習を通じて身に付けさせていくことが求められている。（＊8）

認知心理学者ブルーアー(1997)は、「メタ認知技能は、自分自身の問題解決に批判的になる能力だと考えることができる」と述べている。（＊9）また、三宮（1997）は「学習においてメタ認知を促すヒントや助言が教師や仲間から与えられることによって学習者は効果的な方略を用いることができるようになる。そうした周りからの支援は認知的に『足場をかけること（scaffolding）』になり学習者の能動的な方略使用が推進されることがわかっている」（＊10）と述べている。

これらの知見をふまえ、本研究では「自分の学習を振り返る場の設定」を行う。その場の設定により自分の学習状況を省み、そのことがその後の学習に好影響を与えることになれば、自分の学習状況を自ら省みるメタ認知方略が身に付くと考える。具体的には、「ギャップ」（＊11）をキーワードとして、学齢や学習内容に適した「振り返らせ方」を工夫し、その後の「学びのエンゲージメント」と「思考・判断・表現」などが、持続したりより充実したりすることをねらう。（＊12）

○ 自分と他者とのギャップ（＊13）

例えば、「賛成か反対か」の意見の相違が見られたとき、それぞれの「長所・短所」を分析的に見ることで、自分の意見が更新されたり、新しい課題が発見されたりすることをねらう。

○ 自分と課題とのギャップ

現時点での自分の学習状況と課題解決までの「ギャップ」を自覚することで、「あと何が足りないか」「どうすれば課題解決することができるのか」を具体的にすることで、以降の学習への没頭や思考活動を継続させることをねらう。自己調整学習のプロセスに近い。（＊14）

○ 初めの自分と今の自分とのギャップ（＊15）

自分の学びの伸びや停滞を自覚させる。伸びがみられるときにはそれまでの学習の良さを確認し「持続していけばいいんだ」「でもこれからはこんなやり方も試してみたい」という意欲の持続につながるようにする。停滞については「自分と他者とのギャップ」に着目させることで追究意欲を喚起できるようにする。

☆授業評価

本研究における授業評価はパフォーマンス評価を用いる。パフォーマンス評価は客観テストだけでは本物の学力を評価しきれないという批判から誕生している。そこには客観テストでは測りきれない質的なものを捨象せず評価することで評価の妥当性を保障しようとする問題意識がある。そのための具体的な道具がルーブリックである。ルーブリックは「何をどのような観点で評価するか（規準）」を示すとともに、「どの程度できれば合格レベルか（基準）」も示しているため、評価規準であり評価基準であるといえる。（＊16）

また、総括的評価として「主体的に学習に取り組む態度」だけを単独で評価するのは難しい。むしろ、前出の文科省（報告）で取り上げられているように観点を一体化させて評価するのが妥当であると考える。（＊17）よって本研究では「主体性は単独では見取りにくい。そこで『主体性が発揮された時に表出されるであろう思考・判断・表現等の内容や姿』や『主体性が発揮された時に獲得されるであろう知識・理解の内容』などを絡めてルーブリックを作成することで、『主体的に学習に取り組む態度』に対する妥当な評価をめざす。」という目的でルーブリックを用いた学習の評価を行う。

また、パフォーマンス評価は、一般的にはパフォーマンス課題と対になって活用されるが、例えば、本時の授業の課題がパフォーマンス課題の定義「様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題」（＊18）にかなっているかどうかは本研究においては追究しないので、パフォーマンス課題の設定及び表記は各授業者の任意とする。

【参考・引用の文献】

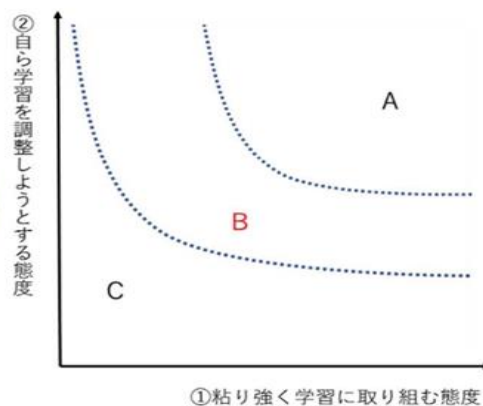
(*1)【児童生徒の学習評価の在り方について（報告）】2019年 文科省

これら①②の姿は実際の教科等の学びの中では別々ではなく相互に関わり合いながら立ち現れるものと考えられることから、実際の評価の場面においては、双方の側面を一体的に見取することも想定される。例えば、自らの学習を全く調整しようとせず粘り強く取り組み続ける姿や、粘り強さが全くない中で自らの学習を調整する姿は一般的ではない。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ

○ 「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行うとする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面を評価することが求められる。

○ これら①②の姿は実際の教科等の学びの中では別々ではなく相互に関わり合いながら立ち現れるものと考えられる。例えば、自らの学習を全く調整しようとせず粘り強く取り組み続ける姿や、粘り強さが全くない中で自らの学習を調整する姿は一般的ではない。



(*2)【児童生徒の学習評価の在り方について（報告）】2019年 文科省 P2

【基本的な考え方】

「学習評価については、子供の学びの評価にとどまらず『カリキュラム・マネジメント』の中で、教育課程や学習・指導方法の評価と結び付け、子供たちの学びに関わる学習評価の改善、更に教育課程や学習・指導の改善に発展・展開させ、授業改善及び組織運営の改善に向けた学校教育全体のサイクルに位置付けていくことが必要」とし学習評価に関わる取組をカリキュラム・マネジメントに位置付けることの必要性に言及している。

これらの表記を受け、本研究では当報告の視点を、まず、授業改善の視点として捉えることにする。

(*3)「学習意欲の理論」 鹿毛雅治 2013年 三水舎 P7

(*4)「学びのエンゲージメント 主体的に学習に取り組む態度の評価と育て方」2022年 クレイス社 櫻井茂男 P11

「学びのエンゲージメント」は「学習への積極的な取り組み」あるいは、その態度ということになります。これは「主体的に学習に取り組む態度」とほぼ同義なのです。学びのエンゲージメントこそ、教育評価の新しい時代を切り開く申し子のような概念です。

(*5)「学びのエンゲージメント 主体的に学習に取り組む態度の評価と育て方」 2022年 クレイス社 櫻井茂男 P63-64

(*6)【児童生徒の学習評価の在り方について（報告）】2019年 文科省 P13

発達の段階に照らした場合には、児童自ら目標を立てるなど学習を調整する姿が顕著にみられるようになるのは、一般に抽象的な思考力が高まる小学校高学年以降からであるとの指摘もあり、児童自ら学習を調整する姿を見取ることが困難な場合もあり得る。…特に小学校低学年・中学年段階では、例えば、学習の目標を教師が「めあて」などの形で適切に提示し、その「めあて」に向かって自分なりに様々な工夫を行おうとしているかを評価することや、他の児童との対話を通して自らの考えを修正したり、立場を明確にして話したりする点を評価するなど、児童の学習状況を適切に把握するための学習評価の工夫の取組例を示すことが求められる。

(*7)【児童生徒の学習評価の在り方について（報告）】2019年 文科省 P10

(*8)「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来」2020年 ミネルヴァ書房：白井俊 P121

DeSeCoにおいても「省察・振り返り（Reflectivity）」が重視されていたが、特に多くの「21世紀型スキル」の提案において取り上げられているのが「メタ認知」に関することである。…メタ認知スキルが重要視されるようになってきているのは、それが学習していく過程に影響するからである。…すなわちメタ認知は様々なコンピテンシーを発揮していくための前提ともいえるのである。

(*9)「授業が変わる」1997年 北大路書房 J.T. ブルーアー P64-66

認知科学者はメタ認知技能と、それをいつ使用するかを生徒に教える教授法を「メタ認知的気づきのある」教授法と呼んでいる。…メタ認知技能は、自分自身の問題解決に批判的になる能力だと考えることができる。…最初に教師は生徒に批判役のモデルを示す。生徒は次第にこのメタ認知的な批判的役割を教師と共有し始める。生徒は最終的には、つまりいたときには教師の指導を受けながらも、自分自身で批判的役割を行えるようになる。…

(*10)「メタ認知で〈学ぶ力〉を高める」2018年 北大路書房 三宮真智子 P54

(*11)「ヤマ場をおさえる学習評価」2021年 図書文化社 石井英真・鈴木秀幸 P32『形成的評価の新しい考え方』

子供自身が自らのパフォーマンスのよしあしを判断していけるようにするには、授業後の振り返りカードや感想カードなどで、学習の意味を事後的に確認・納得するのでは不十分です。大切なのは学習過程において目標、評価規準とそれに照らした評価情報を教師と子供の間で共有することです。これにより、子供自らが**目標と自分の学習状況とのギャップ**を自覚し、それを埋めるための手立てを考えるように促すことが必要となります。

(*12)「ヤマ場をおさえる学習評価」2021年 図書文化社 石井英真・鈴木秀幸 P48『主体的に学習に取り組む態度』をどう評価するか

『報告』では「主体的に学習に取り組む態度」のみを単体で取り出して評価するのではなく、「思考・判断・表現」などと一体的に評価していく方針が示されています。例えば問いと答えの間が長く試行錯誤の機会が伴うパフォーマンス課題（思考のみならず、粘り強く考える意欲や根拠に基づいて考えようとする知的態度なども要求される課題）を設計し、その過程と成果物を通して、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の両方を評価するわけです。

(*13)大阪教育大学附属天王寺小学校 平成25年度研究紀要「主体的・対話的で深い学び」に向かう授業デザインー『省みる』ことを通してー

仮説「子どもが主体的に各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせ、自分の学びを『省みる』ことを通して対話が起こったり、対話がきっかけとなって『省みる』ことを始めたりすることで、深い学びに向かうことができ、子どもの資質・能力を育むことができる。」を授業にて検証している。ここでは特に自分と他者の見方・考え方の違いに注目して「自分の考え」を調整し、新たな「自分の考え」を持つことのよさに気づくように授業設計しようと試みている。この研究を本研究では、自分の学習を振り返る手立ての1つとして位置づける。

(*14)「自己調整学習」2023年 明治図書：木村明憲 P29

Zimmerman and Schunk は、計画（forethought）、遂行または意思的制御（performance or volitional control）、自己内省（self-reflection）からなる学習サイクルモデルを提示し、この3つのフェーズを循環することが重要であると記している。

(*15)「学びのエンゲージメント 主体的に学習に取り組む態度の評価と育て方」2022年 クレイ社 櫻井茂男 P138-139

自己効力感の研究で有名なアメリカの心理学者バンデューラ(1997)によれば、自己効力感を高めるには直

接的な成功体験がもっとも強力ではあるものの、その他にも代理的な成功体験（例えば、友だちが成功するのを見て自分もできそうだと思う）、言葉による説得（例えば、信頼している教師に「君ならできる」と説得され自分でもできると思う）、情緒的な覚醒（例えば、朝からよいことが続き、気持ちが高揚していて、これもやればできると思う）も、自己効力感に影響を与えているとしています。

（*16）「見方・考え方を育てるパフォーマンス評価」2018年 明治図書 石井英真 西岡加名恵 P48-49 P62-63

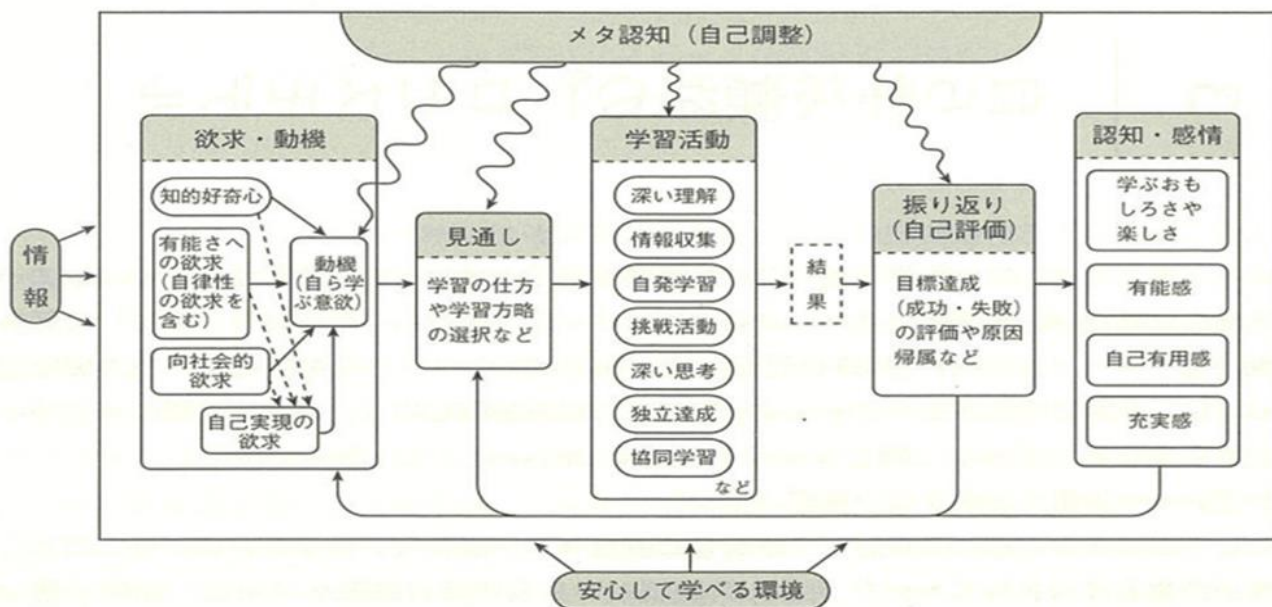
（*17）【児童生徒の学習評価の在り方について（報告）】2019年 文科省 P13

「主体的に学習に取り組む態度」の具体的な評価の方法としては、ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や、児童生徒による自己評価や相互評価等の状況を教師が評価を行う際に考慮する材料の一つとして用いることが考えられる。その際、各教科等の特質に応じて、児童生徒の発達の段階や一人一人の個性を十分に考慮しながら、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で、評価を行う必要がある。したがって、例えば、ノートにおける特定の記述などを取り出して、他の観点から切り離して「主体的に学習に取り組む態度」として評価することは適切ではないことに留意する必要がある。

（*18）「見方・考え方を育てるパフォーマンス評価」2018年 明治図書 石井英真 西岡加名恵 編著 P16

（参考資料）「学びのエンゲージメント 主体的に学習に取り組む態度の評価と育て方」2022年 クレイス社 櫻井茂男 P38

【自ら学ぶ意欲のプロセスモデル】



*上記のプロセスモデルでの「振り返り」（自己評価）を行った後の児童の学習状況を形成的評価（パフォーマンス評価）を行うこととする。そして、新たな「見通し」→「学習活動」のサイクルに戻る。そうすることで、「問いと答えの間の長い」学習となり、試行錯誤の機会が増えたり、粘り強さが持続したりする学習が成立することをめざす。